一般演題11-3
会陰部の重症軟部組織感染症の1治療例
～院内連携の重要性

松谷眞由美[1)]　玉木英樹[2, 4)]　佐島秀一[2)]
綿貫　實[3)]　松原龍男[3)]　合志勝子[4)]
合志清隆[4)]

1)　玉木病院　看護部
2)　玉木病院　外科
3)　玉木病院　内科
4)　琉球大学病院　高気圧治療部

【はじめに】

会陰部の壊死性筋膜炎は重症化しやすく，高齢者や糖尿病などの基礎疾患を持った患者に多く発症して，現在でも死亡率の高い疾患である。今回，同疾患に対して一般的な治療法に高気圧酸素治療（HBO）を併用して良好な治療結果が得られた症例を報告する。通常，この種の重症軟部組織感染症に対してHBOは高い治療圧が推奨されている。しかし，高齢者や全身状態が不安定な患者でのHBOでは標準的な治療圧を用いることは，病状急変時の緊急減圧が必要な1人用装置では，高い治療圧のHBOの実行は躊躇される。一方で，軟部組織重症感染症では創処置が頻繁に必要で，それに加えてHBOが追加されることになるが，病院内の施設配置では処置室とHBO室は比較的に近距離にあった方がよい。さらに，院内施設の配置だけではなく，医療スタッフの連携も重要になる。このような軟部組織感染症の治療の観点から今回の治療例を紹介する。

【症例】

74歳の日常的に自立した女性であり，糖尿病や自己免疫疾患などの基礎疾患はなかった。H25年12月20日頃から，右会陰部の腫脹，疼痛を認め，12月23日から疼痛が増強し，翌24日には自然排膿がみられ前医を受診した。抗菌剤による治療が開始されたが，症状改善なく同月27日に壊死性筋膜炎の診断で当院に紹介された。意識障害はなかったがショック状態であり，悪臭をともなう会陰部から下腹部にかけて広範な皮下組織の壊死がみられ，発赤は臀部まで広がっていた。入院当日に切開排膿が行われ，抗菌剤の治療に加えてHBOの指示があった。高齢者でショック状態であることから，当初は担当医にも同席してもらい，HBOは2ATA（100分間）で日に2回を行った。治療から3日目には病状が安定し，炎症反応の低下もみられたことから，日に1回の指示に変更され，治療時間も80分間さらに60分間へ変更された。当院のHBO室 は救急外来と隣接しており，医師や他の医療スタッフとの連携を密にとっている。その後，徐々に創部の改善が得られたが，平成26年2月1日には難聴と耳痛を訴え中耳炎を併発したことからHBOは終了とされた。

【考察】

重症軟部組織感染症は現在でも治療予後の悪いものであるが，従来から抗菌剤に加えてHBOの併用がなされてきた。この種の疾患に対してHBOの有効性は統計学的には明らかされていないことから，臨床試験の計画も提唱されたことがあったが，この疾患には従来からHBOの併用が標準化されてきたことに加えて，倫理的な側面からも治験は行われていない。しかし最近，非ランダム化試験のメタ解析の結果では，この疾患でのHBOによる死亡率の抑制が示されている（OR: 0.36, 95%CI: 0.15-0.85）。以上の重症軟部組織感染症のなかでも体幹部ないし会陰部では治療予後が悪く，会陰部での死亡率は現在でも3～45%とも報告されているが，この症例はHBOの併用治療で比較的良好な結果が得られた。これは担当医の指示で，急変時に備えて治療圧は2ATAに抑えて治療時間は長めにして，日に複数回のHBOを行うことにしたが，この方法は高齢患者あるいは病状が不安定な患者でも対処しやすいと考えられる。この種の疾患では創処置が頻繁に必要になり，処置室とHBO室とが隣接していることもスムースな治療を行う上で重要である。さらに，病状が不安定な状況では医師や他の医療スタッフとの密な連携は不可欠である。